

《論説・動向》

フランス革命・ナポレオン期ヨーロッパにおける美術品の移動とその影響

服部 春彦

10年ほど前から、フランス革命・ナポレオン期にヨーロッパで起こった美術品の地域間移動に興味を持ち、少しずつ調べている。3年前に発表した拙著『文化財の併合——フランス革命とナポレオン——』（知泉書館刊）では、この時期にフランス人が近隣の国々から様々な美術品を押収あるいは収奪してパリへ持ち帰り、その一部を新設のルーヴル美術館に公開展示したこと、またそれらの押収美術品の大部分はナポレオンの失脚後に元の所有国へ返還されたことを通観した。その1つの動機は、このテーマに関してフランスなどでは今日までに様々な興味深い研究が蓄積されているにもかかわらず、その内容がわが国にはほとんど紹介されていないことにあった。幸いにも幾人かの方から好意的な書評を賜うことができたが、そこでは不十分な点として、美術品の収奪と返還がその対象となった国や地域に与えたインパクトの考察が不足していることが指摘された。フランスの支配を受けたドイツやイタリア各地において文化財を国民の共同遺産と見る意識が強まり、美術品の公開や公共の美術館創設への動きが促進されたことにはある程度触れたつもりであるが、本格的な説明はそれぞれの国と地域の専門家の手に委ねたいと思う。

ところで、上記の時期に革命と戦争の影響の下に起こった美術品の大規模な移動としては、上述のもの他に2つの重要な動きがある。絵画だけに絞って言うと、その1つは、フランスの貴族、ブルジョワらが反革命運動の資金を得るため、あるいは革命派による没収をまぬがれるためにコレクションを売却したり、国外（主にイギリス）へ持ち出したりしたことに起因するものである。最も有名な例はオルレアン家の絵画コレクションの売却によるイギリス流出である。それは18世紀初期に国王ルイ15世の摂政を務めたオルレアン公フィリップが形成したコレクションで、1788年に作成された目録によると、イタリア・フランドル・オランダ派など「17世紀以前の大画家」（Old Masters）の作品を主体に約480点の絵画から成り、当時のヨーロッパで最も重要な個人コレクションであった。

もう1つの大きな動きはフランス以外の諸地域からイギリスへの多数の絵画の移動である。有名なイタリアの例を挙げると、ローマ、ジェノヴァ、フィレンツェなどでは、ナポレオン軍による財貨の徴発や過重な租税要求に直面した都市の貴族や富裕層は、経済的窮迫からそのコレクションを手放すことを余儀なくされた。彼らの絵画は折柄イタリア各地で機会をうかがっていたイギリス人画商とそのエイジェントによって速やかに買い取られ、ロンドンへ運ばれた。

イギリスの税関の記録によると、1792年から1815年までにヨーロッパからイングランドに輸入された絵画の総数は約18,000点に達する。その主要な供給先はフランス（4,798点）、イタリア（3,235点）、ドイツ（3,535点）、オランダ（2,795点）であり、4者で総数

の8割を占める¹⁾。無論傑作ばかりではなく、二級品、三級品も少なくなかったが、上述のフランスによる押収絵画の総数が（政府統制下の押収分に限ると）2,400点程度であったことから見ても、大変な数である。

そこで問題は、このように大量の絵画の流入がイギリスの美術市場にどのような影響を与えたかである。この点は近年欧米において研究者の新たな関心を呼んでおり、基礎的な資料の整備も進められているので、以下手短かに紹介してみたい。

まず、1793年と1798-99年にロンドンで行われたオルレアン・コレクションの売立てについては、スコットランド出身の法律家で画商の William Buchanan が1824年に出版した2巻本の回顧録 *Memoirs of Painting* の第1巻に詳述されており、上記の売立て時のカタログの書込みをも参照することで、多数の絵画の売価と購入者名を知ることができる。残念ながら歴史家によるこの問題の体系的な研究は今日までなされていないが、近年新たな探究の動きも認められる。例えば2003年と2004年にはパリの国立美術史研究所によって、フランス革命の影響で起こったヨーロッパの美術市場と美術品の収集活動の重要な変化について論議する国際研究集会が組織されたが、そのうち2004年の研究集会の報告集²⁾の第1部には、オルレアン・コレクションに関する4本の論考が収められており、その売却＝流入がイギリス人の絵画趣味 (taste) やコレクションの形成 (collectionnisme) に与えた影響について再考が加えられている。そこでは、それまで入手困難であったイタリア Old Master 絵画の収集熱の高まり、新しいタイプのコレクターの登場とコレクションの公開展示への動きの加速などが指摘されているが、そうした変化をオルレアン絵画の売却＝流入のみに帰すことには慎重な論者も存在する。

次にイタリアからの絵画の流入については、上述の Buchanan の著作の第2巻がイタリア在住のエージェントとの間で交わされた書簡を多数引用しながら記述している³⁾。個別のイタリア貴族のコレクションの売却例に関するモノグラフは管見の限り存在しないが、これについてはイタリア史の専門家にご教示を乞わなければならない。

ところで、もう1つの2003年の研究集会の報告集⁴⁾巻頭の Fredericksen 論文は、1781年から1830年までの英仏両国の年々の絵画売却数を比較考察して、19世紀の初めにはロンドンがヨーロッパ美術市場のハブとしての地位を確立したことを確認している。また Fredericksen のデータによると、1792-1815年のイギリス (Britain) の売立カタログに現れる絵画の総数は約124,000点に上っており、それはこの間の大陸からの絵画の輸入数の約

¹⁾ 数字は以下の註5)に挙げた総覧 (Index) 第2巻及び第4巻冒頭の、編者 Fredericksen による Introduction に拠る。

²⁾ Roberta Panzanelli et Monica Preti-Hamard (sous la direction de), *La circulation des œuvres d'art, 1748-1848*, Presses Universitaires de Rennes, 2007.

³⁾ Buchanan がエージェントらに宛てた商業書簡100通を収録した Hugh Brigstocke, *William Buchanan and the 19th Century Art Trade: 100 Letters to his Agents in London and Italy*, 1982 も当時の絵画取引の実態を知る上で非常に有益である。

⁴⁾ Monica Preti-Hamard et Philippe Sénéchal (sous la direction de), *Collections et marché de l'art en France, 1789-1848*, Presses Universitaires de Rennes, 2005.

7 倍に達する。このことから見ると、ロンドン美術市場のアクターや取引形態の変動、絵画趣味やコレクション形成のプラティークの変化といった問題は、輸入された絵画だけでなく、ロンドンで売買された絵画全体を視野に入れて論じられる必要があるだろう。そして幸いなことに、米国ロサンゼルスของゲティ情報研究所 (Getty Information Institute) によって、現存する売立カタログの悉皆調査を基に、売買された絵画 1 点 1 点の作者とタイトル (または解説)、基材、フォーマットとサイズ、売立ての日時及び場所、競売人、販売者と購買者の名前、売却価格などを記載した総覧 (Index) が作成され、そのうち 1801 年から 1820 年までの分は 4 巻 7 分冊として出版されているのである⁵⁾。全体で 5,000 頁を超えるこの膨大な資料集を活用した研究は国外でも未だ公表されていないようであるが、本格的に取り組んでみる価値があるのではないだろうか。

(京都大学名誉教授)

⁵⁾ Burton B. Fredericksen, Edited by, *The Index of Paintings Sold in the British Isles during the 19th Century*, 4 Vols (7 parts), 1988-1996. なお、フランスについても 1801-1810 年の売却絵画の総覧が刊行されており、パリの美術市場についても同様な分析が可能になっている。